

『留学交流』

2014年 10月号

特集

日本人学生のための
留学後フォローアップ



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

『留学交流』 2014年10月号 目次

特集 日本人学生のための留学後フォローアップ

【論考】 1

留学のインパクトを若い世代へ-グローバル人材5000プロジェクトが目指すもの-
Disseminating the Impact of Study Abroad:

What can We Accomplish through the GJ5000 Project?

東洋大学国際地域学部教授 芦沢 真五

明治大学国際日本学部教授 横田 雅弘

ASHIZAWA Shingo

(Professor, Faculty of Regional Development Studies, Toyo University)

YOKOTA Masahiro

(Professor, Faculty of Global Japanese Studies, Meiji University)

【事例紹介】 11

グローバルキャリアサポートプログラム - “世界市民” 育成に向けて-

Global Career Supporting Program: For Nurturing “World Citizens”

関西学院大学キャリアセンター課長補佐 弓山 大輔

YUMIYAMA Daisuke

(Assistant Head, Career Planning and Placement Section, Kwansei Gakuin University)

【事例紹介】 17

勤労青少年の国際交流を活用したキャリア形成支援事業（厚生労働省委託事業）の事例紹介
-海外就業体験者に対する新たな就労支援の試み-

Report of “Career Development Support for Youth with Overseas Work Experience

(A Project Commissioned by the Ministry of Health, Labor and Welfare):

A New Project for Career Development Support for Youth with Overseas Work Experience

一般社団法人JAOS海外留学協議会専務理事 林 隆樹

HAYASHI Ryuki

(Executive Director, Japan Association of Overseas Studies)

【留学・就活体験レポート】 24

日本人留学経験者の就活体験レポート -真の国際人を目指して-

Job Hunting Report by a Japanese Student Studied Abroad:

To Become a Real Internationally-minded Person

創価大学経営学部経営学科 田中 美帆

TANAKA Miho

(Undergraduate Student, Faculty of Business Administration, Soka University)

【海外留学レポート】 31

ポーランドに暮らしてみると -ある日本人学生の視点から-

How Do I Live in Poland?: From a Japanese Student’s Point of View

東京外国語大学大学院博士後期課程 貞包 和寛

SADAKANE Kazuhiro

(Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies)



留学のインパクトを若い世代へ

—グローバル人材 5000 プロジェクトが目指すもの—

Disseminating the Impact of Study Abroad:

What can We Accomplish through the GJ5000 Project?

東洋大学国際地域学部教授 芦沢 真五

明治大学国際日本学部教授 横田 雅弘

ASHIZAWA Shingo

(Professor, Faculty of Regional Development Studies, Toyo University)

YOKOTA Masahiro

(Professor, Faculty of Global Japanese Studies, Meiji University)

キーワード：海外留学、学習成果分析、留学のインパクト分析

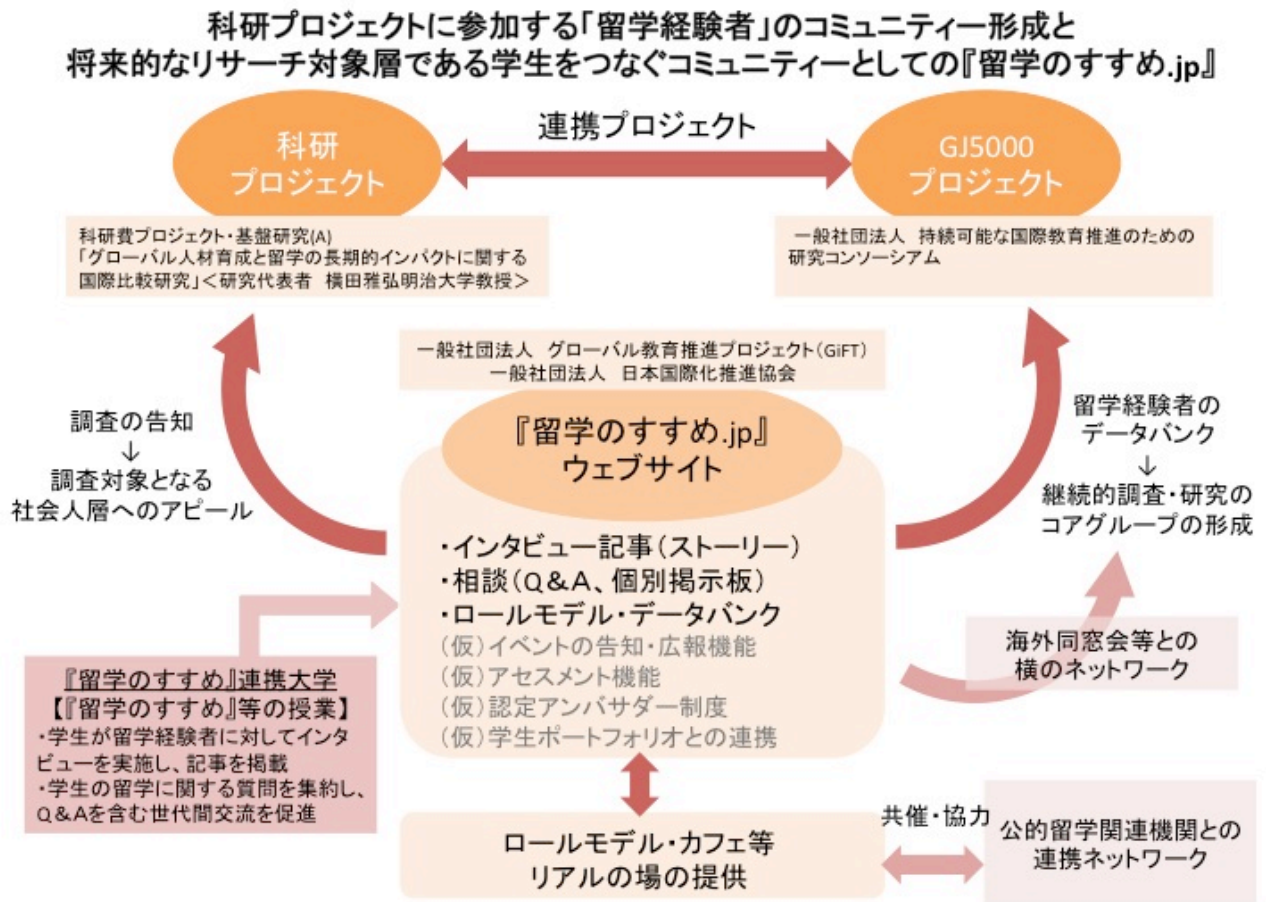
はじめに - 「留学のすすめ.jp」が始動へー

留学経験者 5000 人のネットワークを構築して、研究や教育のために運用するプロジェクト「グローバル人材 5000」（以下 GJ5000 という）は、3 月のキックオフ以降、大学関係者、国際教育関係者、企業関係者などの協力を受けながら発展し、11 月から「留学のすすめ.jp（ドットジェイピー）」というサイトを運用開始することになった。

「留学のすすめ.jp」は、留学経験者のプロフィール、インタビュー記事などを掲載するほか、留学を志望する若い世代が留学経験者に質問したり、助言を得られるようなコミュニケーション機能をもったオンライン・コミュニティーである。最終的には 5000 人を超える留学経験者、留学を志望する大学生や高校生が参加するコミュニティー・サイトとして発展させていく。本年 11 月 22 日、23 日に実施される「学生の海外体験学習とグローバル人材育成にかかわる研究大会」（会場：東洋大学白山キャンパス）において、GJ5000 の特別セッション（11 月 22 日午後）が企画されており、ここで同サイトの詳細を公開し、広く参加者を募る予定である。

GJ5000 プロジェクトは、日本の留学交流を活性化させ、留学経験者のネットワークと繋がることで若い世代の留学を支援し、地球市民としてのグローバル人材育成に寄与することを目的としている。この目的を達成するために、① 研究活動、② ネットワーク構築活動、③ 啓蒙・教育活動をすすめて

いる。本稿では、これら三つの役割を概観するとともに、科研費による研究プロジェクトを基盤としてスタートした GJ5000 の歴史的意義について報告する。また、GJ5000 を支えるオンライン・コミュニティ「留学のすすめ.jp」の概要を紹介する。



1. 研究 - 科研費調査と GJ5000 -

GJ5000 は、文部科学省による科学研究費補助金基盤研究 (A)「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する国際比較研究」(研究代表者：横田雅弘明治大学教授)を基盤として展開されているプロジェクトである。この科研費による研究は、平成 25 年度から 3 年間にわたって実施されているが、米国における同様の研究をモデルとして、留学経験者 5000 人を追跡調査し、留学が個人のキャリアや人生に与えるインパクトを分析していく。また、雇用主や現役学生の意識調査も並行して実施する。

この科研調査は、留学交流をめぐって新しい潮流がおこっていること、留学の成果分析が多面的におこなわれようとしていること、を背景として推進されている。かつてエリート教育の一環としてみながされていた留学であるが、高等教育の市場化の潮流の中で「留学の大衆化」が生み出され、今や全世界の留学生数は 450 万人に達している。従来型の留学と現代における留学の特徴を比較すると、特に留学の形態、目的、期間が多様化しており、従来からの学位取得を目指す留学や交換留学に加えて、フィールドワーク、インターンシップ、国際ボランティアなどが盛んにおこなわれるようになった。

このような留学の形態の多様化にともない、その成果をどう測定し、指標化するのかという課題にも直面している。

一方、高等教育の質保証をめぐる議論を背景に、グローバル社会で活躍しうる人材に求められるスキルと能力を明確化することが期待されている。留学がグローバルに活躍しうる人材育成には有効である、という社会通念は定着しているが、実際にどのようなスキルや能力が海外学習を通じて養成されるのか、を分析する取り組みはまだ始まったばかりといえる。

高等教育の「出口」で学位の「品質保証」をするため、「学習成果」を定義する動きが世界中で展開されている。OECDが推進するAHELO (Assessment of Higher Education Learning Outcome) プロジェクトは、分野ごとの学習成果の定義化をすすめている。欧州の大学では、チューニング・プロジェクトに基づいてDegree Profileという形で、学位の成果として「何ができるようになったか」を明文化する努力がすすめられている。豪州でもGraduate Attributeという名称で学位取得によって得られる能力の定義化をすすめている。このように「出口の品質保証」のために、アウトプットよりもアウトカムを重視する傾向が強まっている。留学交流の分野も同様である。「何人が留学したか」というアウトプットよりも「何ができるようになったか」というアウトカムが重視されるようになってきている。

留学が個人の学びにどのような成果をもたらしているか、については欧米を中心に学習成果分析 (Outcome Assessment) にかかわる研究が盛んにおこなわれてきた。留学によって語学力や異文化適応力が高まることは、すでに多数の研究論文によって立証されている¹。その一方、留学がキャリアや人生に及ぼす長期的インパクトについて多面的な分析は、最近までほとんど行われてこなかった。これまでの研究が、主として1) 留学前、2) 留学中、そして3) 留学直後の3つの段階で実施されてきたため、留学経験者を長期にわたって追跡調査することが困難であったことも起因している。長期にわたる大規模追跡調査の数少ない事例として、Beyond Immediate Impact: Study Abroad for Global Engagement (SAGE) 「国際的社会参画に関して留学が与える長期的インパクトに関する調査」(2006-2009)がある²。この調査は、留学経験のある卒業生 6300 人余りの経験と見解を「回顧的追跡調査(retrospective tracer study)」という手法で検証している。

今回の科研費研究では、この米国における大規模追跡調査、SAGEの手法を参考としながらも、日本独特の社会情勢や教育基盤を考慮して、留学経験のある社会人を対象にオンライン調査を実施する。11月から開始されるオンライン調査では、日本の大学関係者、大使館及び公的留学機関、国際教育団体、海外大学の同窓会、キャリア関係企業、企業の人事部門など、あらゆるチャンネルに協力を呼び掛けて調査を実施していく予定である。

以下のサイトから、アンケートに回答することができるようになるので、留学経験のある社会人の方には是非ともご協力をいただきたい。

アンケートの URL : <http://gj5000.jp/>

回答開始時期 : 2014年11月1日(予定)

日本の高等教育機関にとっては、学生の海外学習を促進し、多様かつ効果的な国際教育プログラムを開発することが喫緊の課題になっている。日本人の海外留学者数が減少している現状において、留学の意義と成果及びそれらの与える中長期的な効果と影響を明らかにすることは、グローバル人材の育成という課題に取り組む大学(国際教育のカリキュラム改革等)と企業(人材採用とキャリア形成)に対して有益な示唆を提供できると考えられる。

II. ネットワーク構築 - 留学経験者を中心として -

GJ5000では、5000人を対象とした科研調査で得られる知見を更に発展させ、留学の意義や成果を長期間にわたって追跡調査していくことを目的に、留学経験者のオンライン・コミュニティ「留学のすすめ.jp」を立ち上げる。また、単に調査目的のためにネットワークを維持するのではなく、留学という共通の経験を基盤とした人的ネットワークを構築することで、このコミュニティは留学促進に向けたプラットフォームとなる。そのために、「留学のすすめ.jp」は留学経験者同士のネットワーク、各大学の同窓会、留学交流を推進する公的機関(文部科学省「トビタテ!留学 JAPAN」、JASSO、各国大使館など)、非営利の教育交流機関(JAFSA など)、各大学の国際交流部門、国際教育にかかわる研究者、一般企業などと連携し、ネットワークを構築・強化していく。

このコミュニティでは、留学経験のあるミッドキャリアと、これから留学を目指す大学生や高校生などとの間で交流を実現する。若い世代が留学経験者に質問したり、助言を得ることができるようにシステム設計がおこなわれている。留学経験者同士のネットワーキングのツールとして、同じ大学に留学した人たちによるコミュニケーション・ツールとしても活用できるように、掲示板等の機能を装備していく。これは、留学経験者同士のネットワーキングを推進するような各種企画を運営していくうえで有効である。さらに、大学等が実施する留学フェア、留学を促進するための授業などで、留学経験者をゲストとして招へいする場合に、このサイトを使って適切なゲストスピーカーを検索することも可能である。

もともと科研の調査研究からスタートしたプロジェクトを、GJ5000という実践的な活動に展開させる背景には、従来の研究の進め方に加えて、教育や社会へのインパクトをもたらしていく、いわば「アクション型」の研究をすすめる必要性が認識されつつあることが大きい。GJ5000は、実践的研究を通じて、留学経験者のネットワーキングと世代間交流を実現しようとしているが、この取り組みを通じて、5000人の留学経験者を長期にわたって追跡調査することが可能になる。

2014年3月7日のGJ5000キックオフイベントでは、文部科学省、大学関係者、JASSOやJAFSAなど

の教育交流専門機関、テンプル大学ジャパン、日本英語検定協会などに加えて、民間主要企業5社の代表も賛同人として応援メッセージを寄せていただいた。産・官・学の連携をネットワークとして形成していることもGJ5000の特徴である。



<写真>3月7日 「グローバル人材5000」キックオフイベント

III. 教育・啓蒙 - 「留学のすすめ.jp」の運用開始へー

GJ5000では、世代を超えて留学体験を共有するオンライン・コミュニティ、「留学のすすめ.jp」を構築することにより、留学経験者がそれぞれの留学体験をシェアしたり、留学希望者にアドバイスする機能を備えた、留学促進のためのプラットフォームを形成する。ここでは実際にどのようにコミュニティを形成していくかを紹介する。

<「留学のすすめ」提携講座による留学経験のデータベース化>

GJ5000プロジェクトでは、「留学のすすめ」など、留学準備のための授業に取り組んでいる大学と連携を進める。「留学のすすめ」という授業は、グローバル人材の育成をテーマとし、学生が留学の意義を理解すると同時に、留学の準備のプロセスを学ぶための授業で、すでに明治大学や東洋大学で取り組まれている³。このほかにも、名称は異なるが、同じように留学を推奨し、留学準備のための授業を行っている大学は数多く存在しており、こうした授業に取り組んでいる大学と提携しながら以下のような展開を計画している。

「留学のすすめ」の授業では、グローバル社会で活躍している社会人、起業家などが次々と登場し、留学がキャリアや人生に与えた価値について講義をおこなっている。また、授業の課題としては、自

己のポートフォリオと留学志願書を作成するなど、留学への準備と自己実現の可能性を文章化することが課せられている。



2014年春学期「留学のすすめ」告知（協力：公益財団法人日本英語検定協会）

<学生によるインタビュー>

2014年の秋の講座から新たに以下の取り組みを開始して、「留学のすすめ.jp」のコンテンツの一部として公開していく。

- 授業を通じて、学生が留学の価値を理解する機会を持つことに加えて、学生自ら留学経験者とコンタクトし、インタビューする機会を設ける（授業の課題としてインタビューを課す）。
- 親類や先輩など、身の回りに留学経験者がいる場合は、その方にインタビューするが、自分で留学経験者を見つけることが困難な学生には、あらかじめ「留学のすすめ.jp」に登録をお願いしている留学経験者を紹介する（大学関係者やGJ5000関係者の人的なネットワークにより、あらかじめ一定数の留学経験者に登録をお願いしておく）。
- 学生に対しては授業の中で、インタビューの手法、留学経験者とのコンタクトや依頼のプロセス、などを指導するガイダンスを徹底する。このガイダンスの内容は指導用キットとしてオンライン化し、他大学などで同様の取り組みをおこなう場合に活用できるようにする計画である。
- 学生はインタビューした内容や写真を「留学のすすめ.jp」Webサイトにアップロードし、授業担当者と当該の留学経験者が内容を確認したあと、同サイトの記事として公開する。

- 「留学のすすめ」や同じ趣旨の留学準備講座や異文化理解講座を持つ大学に、授業の中で、こうした課題を課すことを基本的な授業内での流れと共に提案し、提携大学を拡大していく。
- この「留学のすすめ」連携大学の担当教職員のネットワークを形成し、研修会や意見交換会などを開催していく。

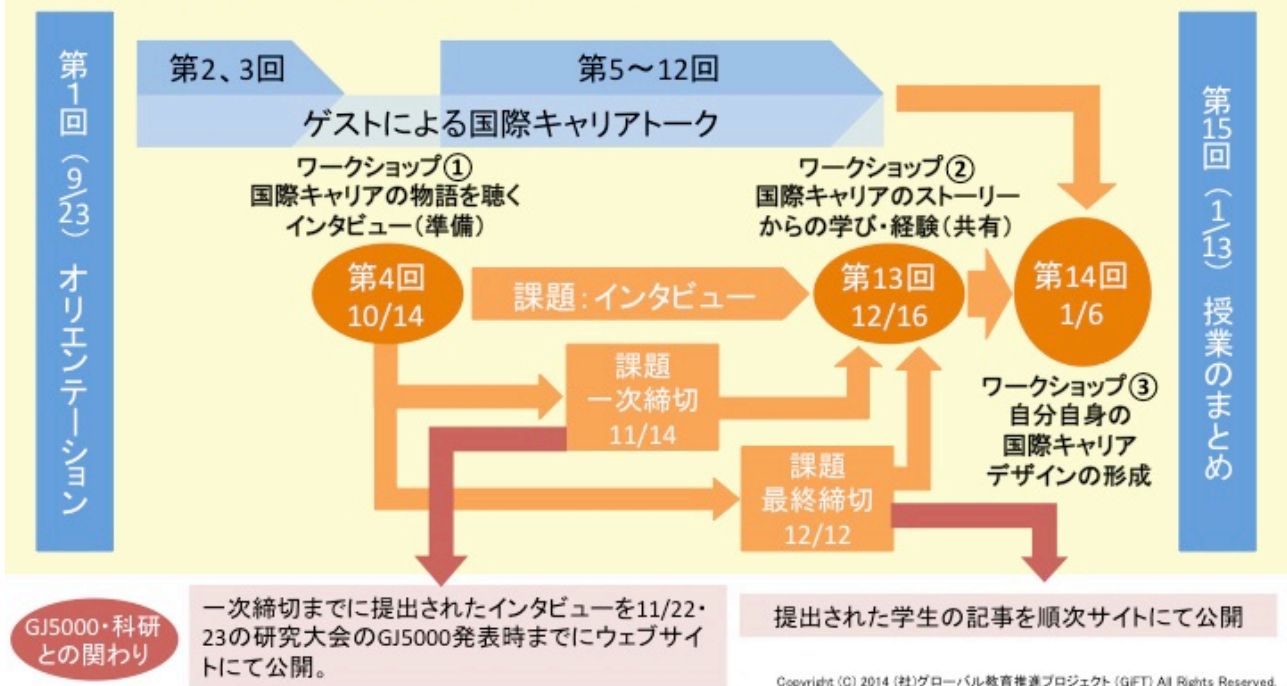
『留学のすすめ』連携大学におけるパッケージ授業の提供

『留学のすすめ』もしくは同様の授業を実施している大学と連携し、パッケージを開発、提供。

- ・3～5コマを連携講座として活用
- ・インタビューを課題の1つとして取り入れ、学生自身が直に留学経験のあるロールモデルに触れる機会を提供

モデルケース：東洋大学『国際キャリア概論』（2014年度秋学期開講）

3コマを「留学のすすめ.jp」との連携講座として行い、学生自身の国際キャリアデザインの形成まで行うことを目標とする。3つの講義（第4、13、14回）はGiFT（事務局長辰野）が担当。



<留学経験者と留学希望者との交流サイト>

「留学のすすめ.jp」のサイトを活用し、留学を希望する大学生や高校生は、留学経験者に質問をしたり、アドバイスを受けることができる。留学経験者は、自らの留学経験が記事として掲載されるほか、学生からの質問や相談がある場合に、都合があれば自らの留学体験に基づいて助言をおこなうことができる。

こうしたオンライン上の交流は、当面は授業の一環としておこなうものであるが、徐々に一般の高校生、大学生にも公開していく。また、留学経験者の方々にも積極的に参加を呼びかけ、メンバー登録を以下のようにすすめていく。

- 科研調査研究のオンラインアンケートに協力していただいた方の中で、サイトの趣旨に同意していただいた方に加入をお願いする。

- 逆にサイトの趣旨に同意して登録していただいた方にアンケートに協力をお願いする。
- 大使館、公的留学交流機関、大学関係者、同窓会関係者に呼びかけ、サイトへの参加と科研アンケートへの協力を同時に依頼する。

また、オンライン以外の交流を進める場として、GJ5000の構成団体であるグローバル教育推進プロジェクト（GiFT）や日本国際化推進協会などと提携して、定期的に交流会を実施するほか、世代間でキャリアや地球市民教育について意見交換するロールモデルカフェなどへの参加を呼びかける。

IV. 今後の展開 - 11月のサイト公開とその後 -

「留学のすすめ.jp」は以下の研究大会において特別セッションを実施し、サイトの内容、運用形態にかかわる詳細説明をおこなう。

学生の海外体験学習とグローバル人材育成にかかわる研究大会

～多様化する海外体験学習と質保証～

【日程】2014年11月22日（土）／23日（日）

【会場】東洋大学 白山キャンパス（文京区白山5-28-20）

【基調講演】Darla Deardorff（デューク大学）

【内容】本研究大会では、大学生、高校生が自らの海外学習の成果を発表する。また、国際共同学習の企画・運営のあり方、学習成果分析の手法、ポートフォリオなどの活用例などについて各教育機関の実践例から学び、意見交換を深めていく。

<お問合せ>

東洋大学 国際地域グローバルオフィス

tel. : 03-3945-8172 mail : ml-g-office@toyo.jp

サイト運営にあたっては、個人情報の取り扱い、不適切な利用を防ぐために、以下のような点に配慮しながら万全の運営体制で臨む予定である。

- 架空の人物による登録、匿名登録を防ぐため、基本的に紹介を受けた招待者をメンバーとして、運営を開始する。直接に参加申し込みがあった場合、匿名性を排除するポリシーを徹底する。
- 留学斡旋を仕事としている方の場合、営業行為などをおこなわないよう、厳しいガイドラインを設定する。守らなかった場合の罰則と運用方法を確立する。参加する学生にもこのポリシーについて周知する。
- 留学経験者にとって、サイトに参加するにあたってインセンティブが明確になるように、メリッ

ト(社会貢献や自身のネットワーキングにおいて有意義な面)を強調する。交流会や同窓会など、留学経験者同士のネットワークにも参加してもらおう。

なお、「留学のすすめ.jp」の運営については、科研調査研究終了後、一般社団法人「持続可能な国際化を推進するための研究コンソーシアム」が主体となって、管理・運営を担当する予定である。

今後より多くの方々と共に日本のグローバル人材育成を加速させる取り組みとして、GJ5000 プロジェクトならびに「留学のすすめ.jp」への参加を呼びかけていく。大学関係者、社会人、学生の皆さんに、更なるご協力とご理解をお願いしたい。

<GJ5000 プロジェクトの問合せ・連絡先>

URL:<http://gj5000.jp/>

E-mail : globaljinzai5000@gmail.com

<「留学のすすめ.jp」のURL>

URL: <http://ryugaku-susume.jp> (2014年11月中旬オープン予定)

<GJ5000 プロジェクトの組織体制>

「グローバル人材 5000 プロジェクト」運営委員会

<参加機関及び研究チーム>

- 科学研究費補助金・基盤研究(A)「グローバル人材育成と留学の長期的インパクトに関する国際比較研究」<研究代表者 横田雅弘 明治大学教授>
- 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)
- 一般社団法人 日本国際化推進協会
- 一般社団法人 持続可能な国際教育推進のための研究コンソーシアム

賛同団体・機関

(キックオフイベントで応援メッセージをいただいた機関)

- 文部科学省
- 日本学生支援機構
- 株式会社ディスコ
- 公益財団法人日本英語検定協会
- 東洋大学グローバルキャリア教育センター
- 明治大学国際教育研究所
- 株式会社リクルート
- テンプル大学ジャパン
- 株式会社 朝日ネット
- 株式会社 ベネッセコーポレーション
- 一般社団法人 JAOS 海外留学協議会
- 株式会社アゴス・ジャパン
- 米国大学院学生会
- 特定非営利活動法人 JAFSA (国際教育交流協議会)

＜参考文献＞

- Bracht, O., Engel, G., Janson, K., Over, A., Schomburg, H., & Teichler, U. (2006). *The professional value of ERASMUS mobility*. Kassel: International Centre for Higher Education Research, University of Kassel.
- Deardorff, Darla K. and Jones, Elspeth. (2012). Intercultural Competence: An Emerging Focus in Post-Secondary Education. In Deardorff et al.'s *The Sage Handbook of International Higher Education*.
- Fry, G., Paige, R. M., Jon, J., Dillow, J., & Nam, K. A (2009, November). The transformative power of study abroad. Portland, Maine: Council on International Educational Exchange (CIEE). Occasional Papers, no. 32.
- Hoffa, W., & Forum on Education Abroad. (2007). *A history of US study abroad: Beginnings to 1965*. Carlisle, PA: Forum on Education Abroad.
- Paige, R. M., Fry, G., Jon, J., Stallman, E., & Josic, J. (2010). *Beyond immediate impact: Study abroad for global engagement*. Research Monograph submitted to the U.S. Department of Education.
<http://www.calstate.edu/engage/documents/study-abroad-for-global-engagement.pdf>
- Vande Berg, M., Connor-Linton, J., & Paige, R. M. (2009). The Georgetown Consortium Project: Interventions for student learning abroad. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18, 1-75.
- Vande Berg, M., Paige, R. M., & Lou, K. H. (2012). *Student learning abroad: What our students are learning, what they're not, and what we can do about it*. Sterling, Va: Stylus Pub., LLC.
- 横田雅弘, 小林明 (2013) 「大学の国際化と日本人学生の国際志向性」学文社

¹ 留学の成果指標として、異文化適応力や外国語能力にかかわる能力の拡大をとりあげた研究は非常に多いが、そうしたアセスメントの成果を蓄積して教育プログラムの改善に役立てようとする動きが始まっている。Forum on Education Abroadでは、学習成果分析の成果を国際教育の実務者の間でシェアするために情報共有する試みをすすめている。同様に NAFSA の Knowledge Community や EAIE Academy においても実務者の間で研究成果の共有がすすめられている。

² SAGE は、R. Michael Paige, Gerald W. Fry (ミネソタ大学) を研究代表者とし、米国教育省タイトル 6 条項研究補助金 (国際調査・研究プログラム) の財政支援を受けて実施された。留学の長期的インパクトを分析する調査で、以下を主要な調査対象としている: (1) 個人や職務に係る利益を超え、社会的利益や公共の利益の検証; (2) 市民的社会参画 (Civil Engagement) に関わる調査: ボランティア活動、地域奉仕活動、サービ斯拉ーニング、アドボカシーなど; (3) 行動的発現に関わる調査 (behavioral manifestations)。

³ 明治大学では 2011 年度から、東洋大学においては 2013 年度から「留学のすすめ」という授業が開始されている。これらはいずれも公益財団法人日本英語検定協会の提携講座として運営されている。

グローバルキャリアサポートプログラム

— “世界市民” 育成に向けて —

Global Career Supporting Program:

For Nurturing “World Citizens”

関西学院大学キャリアセンター課長補佐 弓山 大輔

YUMIYAMA Daisuke

(Assistant Head, Career Planning and Placement Section, KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY)

キーワード：世界市民、Mastery for Service、海外留学

一. 「国際化」の経緯

関西学院は、1889年にW. R. ランバスによって創立され、今秋125周年を迎えました。ランバスは、アジアや欧米をはじめ、アフリカ、南米、シベリアにいたるまで、医療宣教師として国境や民族の壁を越えて多くの人々を救い、「世界市民」としての生涯を送りました。創立者の生き方を受けて関西学院に「国際化」の風土が生まれ、思いやりと高潔さを持って社会の変革に挑む「世界市民」を育成する関西学院のミッションが生まれました。関西学院は、2009年を起点として10年後を見据えた「新基本構想」を策定し、到達すべき目標を6つのビジョンとして決めました。これを実現するために、「新中期計画」に沿って事業展開を進める中で、ビジョンの一つ「国際化」を実現すべく、世界展開力強化（海外協定大学や海外拠点の増加等）、国際教育プログラム（留学等）の拡充、留学生支援体制の強化等を行ってきました。例えば、国連および国際機関・国際NPO/NGOとの連携は、本学の特徴的なプログラムの一つで、国連ボランティア計画（UNV）との協定に基づき、学生を開発途上国に派遣する「国連ユースボランティア」には2013年度までに70名以上が参加しています。さらに2013年度からは「国際社会貢献活動」を新設し、国際協力機構（JICA）が行う青年海外協力隊事業への参加機会がある他、海外の教育機関やNGO事務へ派遣し、世界に貢献できるたくましい学生を育てています。また、日本人学生の海外留学への派遣については、2008年度413名から2013年度1,037名まで約2.5倍に増加しています。

このように「国際化」を強力に推進している本学では、留学経験者のキャリア・就職支援という社

会への送り出しに対しての期待もまた、年々急速に高まりを見せている状況です。

二. 社会で求められる力

本学では、来校される企業の採用担当者へのヒアリングや本学職員による企業訪問を通じて、採用動向等を随時把握しています。この中で、日本人の留学経験者の採用については、企業等からの意見を踏まえ、的確な支援を行う必要があると考えています。日本人の留学経験者は、現在、全国的に約5.7万人と相当数にのぼり、就職活動の場で留学経験を自身の強みとしてPRする学生も少なくありません。このため、留学経験が他学生との差別化要因にならない状況が発生しており、企業の採用担当者からは、「留学経験から語学力を強調するのはありきたり」といった率直な意見を耳にすることが多くなっています。多くの企業では、「留学へ行った事実ではなく、何のために留学したのか、留学により得た付加価値を聞きたい」というように、留学という一連のプロセスの中で、学生が体得した目的意識・主体性・問題解決力などを掘り下げて聞き出す工夫をしています。他方で学生側は、「留学中の考えや行動を通じて、得たことは何か、その後どのように磨き活かしていこうとしているのか」というように、留学の振り返りと将来のキャリアビジョンを具体的に考え、面接官に分かりやすく伝えることが必要となっています。また、実際に企業で働く場合に求められるのは、語学力だけではなく、異文化の中でも他者の価値観を認め議論できる力や不明瞭なことでも勇気を持って一步踏み出すバイタリティ等が挙げられます。留学中には、日本とは異なる社会の中で様々な壁を乗り越えていく必要があるため、これらの力を強化する機会が多くありますが、学生は語学力の向上に専念しがちなので、留学に行く前の意識付けが非常に重要となっています。

我々キャリアセンター教職員は、以上のようなポイントが社会及び企業から求められ、評価されているということをしっかりと学生が認識するよう、支援しなければならないと考えています。

三. グローバル人材育成に向けて

本学では、世界で活躍するために必要な知識、スキル、国際性、実践力を身に付けることを目的とした本学独自のプログラム「実践型“世界市民”育成プログラム」を展開しており、2012年度に文部科学省が推進する「グローバル人材育成推進事業(全学推進型)」に採択されました。本プログラムは、海外への渡航を前提として、語学力やコミュニケーション能力の向上はもちろんのこと、異文化への理解や海外の人と協働してプロジェクトを推進する力等、グローバル社会で活躍できる人材を目指し、以下のように入学から卒業までに段階的に修得を促すものです。(2014年9月までのプログラム登録者は1520名。)

【渡航前（1～2年生）】

国際情勢に関する専門的知識の習得及び語学力の向上を目指す。(世界市民論、グローバルゼミⅠ、グローバルキャリアデザイン入門等)。

【渡航中（2～3年生）】

海外での実践学習を通じて、これまでに習得した能力を活用し、自分の学びを深める。(国連ユースボランティア、交換留学、中期留学、海外インターンシッププログラム等)。

【渡航後（4年生）】

各学部の専門教育や語学教育プログラムを通じて、外国語能力や専門知識のレベルアップを目指す。(スーパー・アドバンスト・イングリッシュ、CROSS-CULTURAL-COLLEGE (※)等)。

※CROSS-CULTURAL-COLLEGE: 100年を超えるカナダとの交流を基盤に、マウント・アリソン大学、クイーンズ大学、トロント大学と連携した約2週間～1カ月間のプログラム。日本とカナダの学生が寝食を共にしながら課題解決等に挑む実践的な科目を中心としており、期間中には、グローバルに展開する企業で約1週間の就業体験ができる。

これらは、本学の国際教育プログラムの一部となります。種々のプログラムを通じて、学生自身の人間力を高めていき、次の就職活動へと繋げています。

四. 就職支援プログラムの紹介

本学では、留学経験者が就職を考えるにあたって、留学前・留学中・留学後を通じて「何のための留学なのか」、「留学経験をどのように活かしていきたいか」ということを考える機会を持つことが大事であると捉え、各種プログラムを展開しています。

<留学前のサポート>

●出国前セミナー

留学前に計3回開催する「交換留学事前研修」の第1回目のプログラムとして実施しているものです。留学することのみで満足するのではなく、「何のために留学をするのか」等、留学に向けての目標設定をすることで、将来に向けたライフデザインや社会への参画を意識させることを目的としています。留学経験のある内定者や社会人より、これから留学に向かう学生に対し、留学中の体験談やメッセージを伝えてもらうことによって、留学に対する目的意識の向上を図っています。

参加した学生の約96%が「役に立った」とアンケートに回答しており、コメントからも高い成果があったことが伺えました。《コメント例：自分自身の意志の持ちようが大事ということや、経験ではなく何を学ぶことが大切かということが聞けてよかったです。》

○プログラム内容

【第1部】

将来のキャリアを意識した留学～企業から求められるグローバル人財となる～

外部講師による、留学経験者の就職活動状況や採用市場の動向、企業側の視点等の講演。

【第2部】

在学生留学経験者の声

留学経験のある在学生(内定者)から、留学中の過ごし方や就職活動への活かし方の紹介。

【第3部】

卒業生留学経験者の声

企業で働いている卒業生から、留学経験が就職先でどのように活かしているか等の紹介。

○開催時期：4月中旬

<留学中のサポート>

●キャリア支援プログラムの情報提供

留学中にも就職活動の準備ができるように、本学学生専用の就職支援サイト「KGキャリアナビ」を通じて、日本で開催している本学のキャリアセンタープログラム（就職活動の進め方や筆記試験対策、エントリーシート作成の考え方等を説明）を閲覧できるように動画配信を実施しています。また、同サイトでは、求人情報や各種就職イベントの情報検索に加えて、企業情報検索による企業研究も行うことができます。

●メール配信による情報提供

帰国後すぐに就職活動が進められるように、キャリア支援プログラム以外にも就職支援情報を随時メール配信。また、海外で開催される合同就職説明会「ポストンキャリアフォーラム」や就職支援サイト「Offer Box Global(※)」の活用方法についての情報等も配信しています。

※学生がプロフィールを登録しておけば、留学先にいながら活用企業・団体から選考へのオファーが届く就職支援サイト。

<留学後のサポート>

【帰国時3年生対象】

●帰国後学生対象セミナー

帰国後すぐに就職活動に臨むための支援セミナーとして開催しています。「留学・海外経験があること自体が就職活動においてプラスに働くわけではなく、社会（産業界）が留学経験者に期待するもの

を再認識させる」ことを目的としており、留学・海外経験を経たからこそできることを洗い出し、自己分析をすることで、グローバルリーダーとして求められる資質が何であるかを考える機会としています。また、就職活動スケジュールが変更となる2016年3月卒業予定者には、就職活動の対策が帰国後すぐにできるよう、筆記試験対策の案内とキャリアガイダンスの告知、グローバル企業を中心とした夏季休暇中インターンシップの参加を勧めています。本セミナーでは、参加した学生の約73%が「役に立った」とアンケートに回答しており、学生自身で自分の経験を振り返り、深く考える良い機会になったと捉えています。《コメント例：留学に行った意義について、改めて考えるきっかけになりました。また、就活に対して、良い意味で焦りを感じることができました。》

○プログラム内容

【第1部】

(1) 就職活動に関する全体説明

就職スケジュール、採用市場・企業動向、企業が留学生に求める力等。

(2) 留学経験の活かし方

①留学中の経験振り返り。(個人ワーク)

異文化の中で考えたこと、行動(プロセス)、結果を明確にし、自分の強みを見つける。

②働くイメージ作り。(個人ワーク)

強みから働くイメージを具体的に作り、現在との差を認識し、行動目標へと落とし込む。

(3) 就職活動の進め方

企業の探し方、就職活動の進め方等、具体的な説明を行う。

【第2部】

卒業生、内定者による体験談を聴講。

- ・内定者からは留学経験を活かして、どのように就職活動を行ったかの紹介。
- ・卒業生からは、実際に社会に出た後に、仕事上で留学経験が役に立ったと感じたこと等、本人の具体的なエピソードを交えての紹介。

○開催時期：7月上旬

【帰国時4年生対象】

●学内企業説明会 兼 選考会 (2013年度のみ開催)

交換留学経験がある学生や大学時代に6カ月以上の海外渡航経験がある学生等を対象として、企業をお招きし、学内企業説明会 兼 選考会を開催しましたが、想定していた「留学直後でこれから就職活動を開始する」という学生達の参加が少ない状況でした。これは、留学の帰国時期が一律ではなく、一人ひとり就職活動の開始時期が異なることや、自ら能動的に活動を進めることができる学生が

多いことが要因でした。そのため、本年度は、帰国直後の学生向けに早期からキャリアセンターでの個人面談の利用へ誘導し、留学経験を活かした就職活動のサポートをすると共に、企業の選考会への参加を促しています。

五、最後に

グローバル化の急速な進展に伴い、各国の政治・経済が大きく変革し、企業・団体の活動も日々変わり続けています。変化が激しい時代の中で、大学も国内のみならず海外の動向を踏まえ、柔軟に仕組みを作り変えながら将来のグローバル人材の育成に寄与していく必要があります。

本学のスクールモットーである“Mastery for Service”は「奉仕のための練達」と訳され、隣人、社会、世界に仕えるため、自らを鍛えるという関西学院大学の人間としてのあり方を示しています。この姿勢を持ちながら、自らを取り巻くグローバル社会を認識し、新しい道を切り拓いていくことができる人材の育成を目指し、本学では今後もグローバルキャリアサポートプログラムを強く推進していきたいと考えています。

勤労青少年の国際交流を活用したキャリア形成支援

事業（厚生労働省委託事業）の事例紹介

—海外就業体験者に対する新たな就労支援の試み—

Report of “Career Development Support for Youth with Overseas Work Experience

(A Project Commissioned by the Ministry of Health,
Labor and Welfare):

A New Project for Career Development Support for Youth with Overseas Work Experience

一般社団法人 JAOS 海外留学協議会専務理事 林 隆樹

HAYASHI Ryuki (Executive Director, Japan Association of Overseas Studies)

キーワード：国際交流、キャリア形成、海外留学

■ 初めに

一般社団法人JAOS海外留学協議会¹は、厚生労働省職業能力開発局海外協力課（Ministry of Health, Labor and Welfare, Human Resources Development Bureau, Overseas Cooperation Division）の「2013年度 勤労青少年の国際交流を活用したキャリア形成支援事業」の企画競争において、企画評価委員会の評価の結果、当JAOSの企画が選定され、当該事業の委託を受けた。

実質的には2013年5月より事業が開始され、2013年度の参加者366名の内満足度90%という数字で2014年3月に終了、また2014年4月よりほぼ同内容で2015年3月まで再度継続される。JAOSではこのプロジェクト名をGlobal ACE (Global Action for Career and Employability)²とした。

¹ <http://www.jaos.or.jp/>

² <http://www.global-ace.jp>

■ 事業趣旨

厚生労働省の当企画の仕様書には下記のようにある。

2011年4月に策定された「第9次勤労青少年福祉対策基本方針」において「国際化に対応できる人材の育成は、我が国の社会・経済が直面する課題等に鑑みると重要であり、勤労青少年福祉施策の観点からも、最長で1年間仕事をしながら外国での社会生活を体験できるワーキング・ホリデー、また海外留学を行う青少年に、その前後の機会を捉え、海外体験の目的意識を明確化し、帰国後の再就職を含む職業生活設計に係る不安を除去する観点から、キャリア形成を支援する体制を整備する等の取組を推進する必要がある」とされており、将来のグローバル化に対応できる中間層となる青少年の就業を強力的に推進することが求められているところである。

さらに近年急速に各企業の海外生産比率が高まる等、経済のグローバル化が進展する中で、今後グローバル人材の需要が大幅に高まると予測され、グローバル人材の不足感は特に、中小企業を中心に高まっている状況にある。

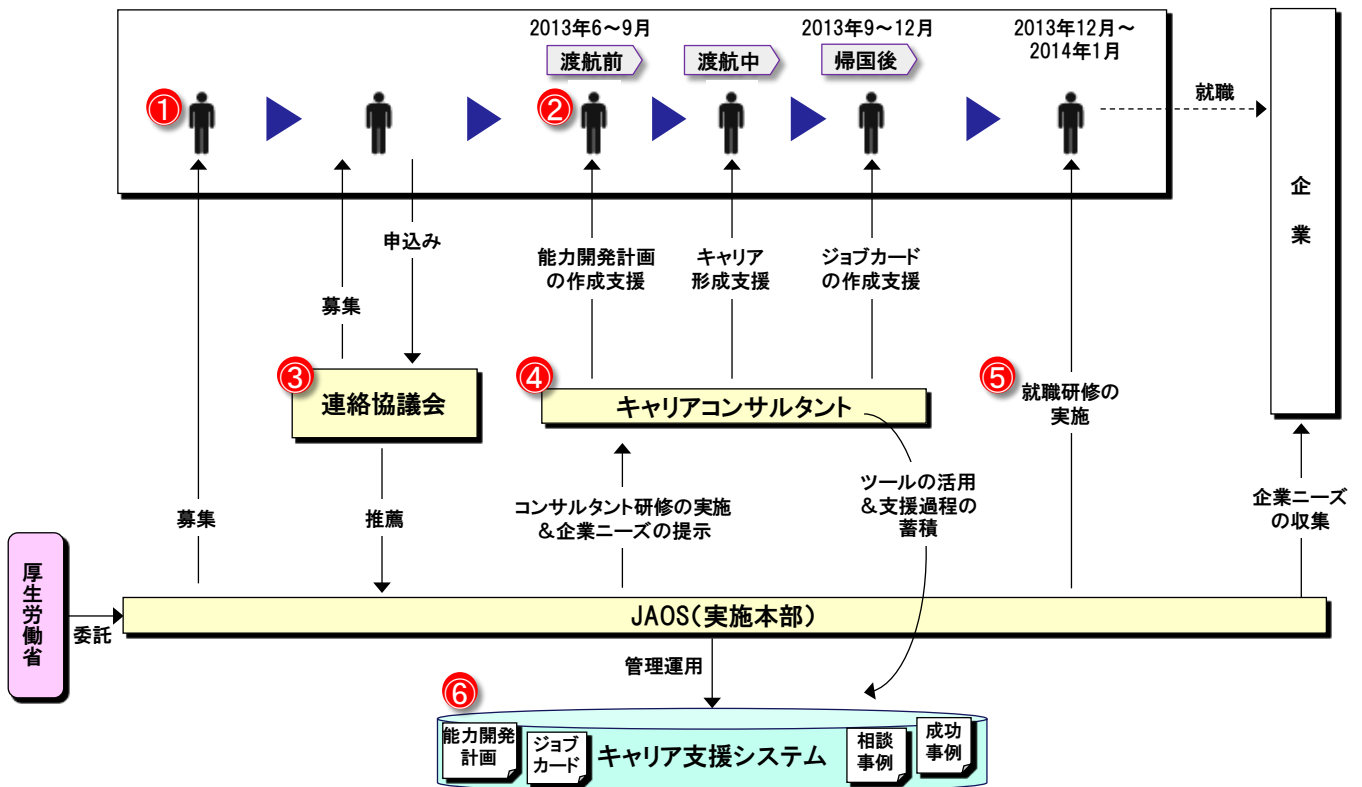
こうした状況を踏まえ、海外就労経験を希望する意欲ある青少年に対し、渡航前における能力開発計画の作成、渡航中における相談援助等により青少年の渡航中の効果的な能力開発を促すとともに、渡航前におけるキャリアコンサルティングの実施、帰国後におけるジョブ・カード（履歴書）を活用した海外・就労体験の評価等を行い、こうして得られた好事例等につき調査研究を行い、報告書を取りまとめる。また、とりまとめた調査報告の公表を通じて、このような一貫した支援における、海外就労体験等を活用した効果的なキャリア形成について広く普及啓発を行うことにより、今後の青少年雇用及びグローバル人材の育成に資することを旨とする。

1. 事業目的

海外インターンシップやワーキング・ホリデー、語学研修等の海外での経験を有する青少年が、その経験を生かした就職が実現できるよう、渡航前から帰国後まで一貫したキャリア形成支援の体制を整備する。

2. 事業概要

- (1) 実施主体：一般社団法人海外留学協議会（JAOS）
- (2) 実施期間：平成25年5月15日～平成26年3月31日
平成26年4月1日～平成27年3月31日
- (3) 全体像と主な活動(平成25年度例)のポイント



①募集

海外インターンシップやワーキング・ホリデー、語学研修等に参加する無職の青少年（概ね35歳位まで）へ対し、当事業を告知する。なお学生は対象外とする。

②支援対象者数

渡航前は400人程度を対象とし、帰国後は300人程度を対象とする。

③連絡協議会

留学エージェントや旅行事業者等の法人からなる協議会を開催し、当事業への協力を図る。

④キャリアコンサルタント

海外経験に詳しくかつ厚生労働省認定の試験を修了したキャリアコンサルタント約20名強程度に2日間のセミナーを行い組織化し、特に今回の対象者のキャリア意識を考慮し「教育コーチング」を導入、「動機」部分における「モチベーション・アップ」のスキルを強化した。

⑤キャリアコンサルティング・就職研修

支援対象者へ対して渡航前～帰国後にわたるキャリアコンサルティングを行う。帰国後の支援対象者に対して、全国数8ヶ所（札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、松山、福岡）で就職研修を実施する。

⑥キャリア支援システム

能力開発計画やジョブカード、相談事例、成功事例などのツールおよびデータを一元管理するシステムを構築する。

3. 実施内容

- | | | |
|-------------|------------|--|
| 5月 | 1.連絡協議会の実施 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業での支援対象者 400 名の募集（社会人、学生は対象外） ・ ワーキングホリデー等に関する実態調査の実施（体験者 1 万人程度） ・ 事業に関する広報 |
| 5～9月 | 2.渡航前の支援 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 渡航中の能力開発計画例の作成 ・ 渡航前のキャリアコンサルティングの実施 |
| 6～12月 | 3.渡航中の支援 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 海外渡航中の者からの eメールによる相談の受け付け及び回答等による援助 ・ インターネットを活用した渡航先の労働事情等の情報提供 ・ 相談事例をとりまとめ、海外経験で生じる問題の分析を行い報告書の作成 |
| 9～1月 | 4.帰国後の支援 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 事後研修（就職研修） ・ ジョブカードの活用による帰国時における海外経験の評価 ・ 帰国後のキャリアコンサルティングの実施 ・ 事例分析に基づく報告書「海外経験を活用したキャリア形成（仮称）」の作成 |
| 2014年
3月 | 5.普及啓発 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 各都道府県、労働局、ハローワークなど約 5000 箇所を上記報告書の配布およびインターネットを通じた普及啓発 |
| 1～3月 | 6.事業の評価 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 帰国後 3～6 カ月後に全支援者へ追跡調査を実施 |

4. Global ACE連絡協議会³の組織化と依頼事項

- ・ 留学エージェント、旅行代理店等への連絡協議会への参画呼び掛け
- ・ 連絡協議会メンバーとなるための「連絡協議会海外体験プログラム共通ガイドライン⁴」の説明・理解徹底と遵守要請
- ・ 支援対象渡航者の募集及び実施本部への推薦
- ・ 当事業を各社の HP で紹介（当事業専用 Web サイトのバナー設置など）
- ・ ワーキング・ホリデー等に関する実態調査への協力
- ・ 帰国後事後研修（就職研修）の受講者募集に関する協力
- ・ その他当事業に付随する業務に関する協力

■ 事業報告・課題

以下、事業報告としていくつか重要なものをあげるが、今回の報告書は JAOS ホームページ (<http://www.jaos.or.jp/globalace/index.html#report>) よりすべてダウンロードできる。

報告書は次の通りである。

- ① 海外就業体験が若年層の職業能力開発・キャリア形成に及ぼす影響・効果に関する調査研究
(A4: 305 ページ)

³ <http://www.global-ace.jp/organization/council.html>

⁴ <http://www.global-ace.jp/organization/pdf/rule.pdf>

- ② 海外体験を活かしたキャリア形成事例分析（平成25年度版）（A4：205ページ）
- ③ 海外体験を活かしたキャリア形成事例分析・ダイジェスト版（平成25年度版）
（A4：114ページ）

②③について全国のハローワーク、労働局、ジョブカフェ、国際交流協会、JAFSA⁵会員大学、また関連大使館、商工会議所、全国の中小企業団体中央会等合計2000カ所へ配布した。

1. 渡航前の支援

今回の調査結果で、渡航前に明確な目的意識を持つことが、スキル全般の向上や帰国後の成果に大きく影響することが明らかとなった。また、海外就業体験をした青少年からは、「渡航前にアドバイスを受けていたほうが、より効果的な就業体験になる」という意見が多いこともわかった。これらのことから、渡航前におけるオリエンテーション、情報の提供および相談体制の強化を通じて、参加者に目的意識を持たせることが、海外就業体験をより有益なものとするための優先課題となる。

2. 滞在中の支援

滞在中は、本人の自主性を鍛えるために、あるいはひとりで主体的に様々な問題に取り組むという、それこそが、海外就労・体験の大きな目的でもあるので「成長を見守る」スタンスが本来ではあるが、滞在中の活動や成果を可視化したり、相談に応じたりすることでモチベーション・アップにつなげ、帰国後のスムーズな就職につなげることもある意味有効であると思われる。今回の調査結果でも、参加者にとって、滞在中に求められる支援・対策として、「(トラブルや困ったときの) 相談窓口の設置、現地(日本人による) サポート」が20.5%と最多であった。手厚すぎる支援は本人の成長に逆効果であるが、相談先というセーフティネットがあるからこそ前向きに様々な事柄にチャレンジできるという側面も考えられ、また、滞在中の支援はそのようにあるべきである。

3. 帰国後の支援

海外就業体験で得た能力を将来のキャリアに活かしたいと思う青少年が増える中、その能力が、企業等が期待する能力でない限りマッチングはうまくいかない。この点に関し、グローバル社会における企業等が求める人材ニーズを調査、把握することは重要で、そのニーズと海外就業体験で得ることができる成果とをすり合わせていく取り組みが必要と思われる。

⁵ <http://www.jafsa.org>

4. 企業への働きかけ

ワーキング・ホリデー制度を利用した青少年が帰国後の就職活動で「有利とはならなかった」とする回答が48.2%もある。従来型日本企業の採用活動においてはキャリアの断絶は好まれないことが一般的である。そうした背景のもと、同制度を利用した青少年が現地で研鑽を積んだとしても、制度の詳細を知らない人事担当者には制度名称の「ホリデー」の印象が強く、「海外で遊んできただけ」とのイメージを持たれてしまう傾向があるように思われる。

もちろん、ワーキング・ホリデー制度を利用した青少年で1年間を休日として楽しみ過ぎる者もいるのは確かである。しかし、参加者のTOEICのスコアを見ても帰国後平均で731.4点と高いスコアを残しており（平均107.3点の向上）、決してレジャー目的の者だけでないことは明らかである。ワーキング・ホリデーを単なる「ホリデー」と考えずに、グローバル感覚とチャレンジ精神を持った青少年を積極的に受入れる土壌づくりも望まれる。

5. ワーキング・ホリデーの制度の在り方

前述のように、ワーキング・ホリデー制度は名称に「ホリデー」とあることから、青少年が貴重な海外体験を自己のキャリアとして履歴書に記しても、企業側の抱くイメージが「キャリア形成」とはかけ離れて「ホリデーを楽しんできただけ」と捉えてしまうという問題が生じている。

そもそもワーキング・ホリデー制度は協定国により正式名称（ビザの名称）が一律ではないため、制度は現在のままで留学業界等で使用する通称を検討する余地はあるかもしれない。（例：カナダ「インターナショナル・エクスペリエンス・カナダ」、イギリス「ユース・モビリティ・スキーム」）。当該制度を利用した青少年が再就職の際に被る制度名による誤解を是正するうえで、「ワーキング・スタディ」等キャリア形成に関連した呼称への改訂などは検討する価値があるかもしれない。

加えて、企業が今後グローバル展開を推進する地域として、中国やASEANをはじめとするアジアの重要性が増してきているのに対し、現行のワーキング・ホリデー制度では、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、イギリス、フランス、ドイツなどの欧米・オセアニア地域で就業体験を積む青少年が大半を占めており、求人側と求職側との間にミスマッチがあるのではないかと感じられる。ただしここ最近では、台湾や香港などアジア地域間での協定も締結され始めている。

6. まとめ

ー キャリアコンサルタントと留学カウンセラー

ますますグローバル人材が求められる中で、海外就業体験者への求人ニーズも増えるだろうが、一方で企業とのマッチングを担う、海外就業体験に通じたキャリア・コンサルタントが十分いるかとい

うとそうではない。今後はグローバル・キャリア・コンサルタントのような人材の養成が望まれるところである。

また、留学カウンセラーが渡航希望者への相談に乗るとき、また、オリエンテーション等でこのキャリアコンサルタントの役割を担っていることが非常に多いということも今回の調査で分かった。

JAOSでは2007年に留学カウンセラーの認定・資格制度⁶を立ち上げ、現在350名程の有資格者を出しているが、キャリアコンサルタントと留学カウンセラー双方の知識、ノウハウの学習がこれからの課題であると考えられる。

－ 教育の課題としての「自己肯定感」

そして、渡航者に関しては、キャリア志向や自己肯定感などのマインド面が極めて重要であると思われる。

渡航目的を明確に持ち、国内よりも海外のほうが身につけやすい能力・資質というものも想定した能力開発計画を意識して、現地の機会を存分に生かす行動が望まれる。自身の殻を破った事例も多々見受けられたが、人間的に大きく成長できるか否かは結局、本人の意識（やる気）によるところが大きい。自己肯定感の強い人材は就職活動にも自信を持って取り組むことができ、結果につながっている。

職場でも海外就業体験を通じて培われた能力・資質を存分に発揮すれば、企業側の渡航者に対する認識も変わり、海外へ渡航する青少年も増えるのではないだろうか。

また、この「自己肯定感の育成」は海外就労体験のみにとどまらず、ある意味「教育」の問題であり、幼児期の家庭教育、初等・中等教育における教育の在り方を根本から考え直さざるをえない大きな問題でもある。しかし、海外就労体験、留学等、さまざまな教育分野から考えていかななくてはいけない重要な問題である、と考えられる。

⁶ <http://www.jaoscc.jp>

日本人留学経験者の就活体験レポート

—真の国際人を目指して—

Job Hunting Report by a Japanese Student Studied

Abroad:

To Become a Real Internationally-minded Person

創価大学経営学部経営学科 田中 美帆

TANAKA Miho

(Undergraduate Student, Faculty of Business Administration, Soka University)

キーワード：海外留学、就活、留学体験

はじめに

私の通う大学には、「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」という3つの建学の精神があります。そして、学内は建学の精神を具現化するために、智慧、勇気、慈悲の3つを有した地球市民を育成しようとの気概が教授陣や学生にも漲っています。実際に、中堅大学でありながら、交流校は世界48カ国・地域、150大学(2014年8月現在)のネットワークを持ち、海外への留学者数の全学生に占める割合も約10%と決して低くはありません。受け入れる外国人留学生の国籍も多様で、キャンパス内での日常的な国際交流が盛んです。昨今海外短期留学を必修化しようという大学も現れて来ておりますが、学生の多くは自らの強い意志により、「自己特化型」の留学を創造し、自分の人生を切り拓く一つ的手段として、世界に羽ばたいていることを多くの先輩や同期の友人を通して実感しております。そして、私も昨年2月より本年1月までの1年間、中国・清華大学へ交換留学生として派遣して頂くチャンスを得て、多くのことを学ばせて頂きました。

交換留学決定までの道程

私の父は台湾人、母は日本人です。そのため、私は3歳から小学校4年生までの7年間を台湾の現

地私立幼稚園、小学校で学びました。当時の友人とはFacebookを通じて今でも交流がありますが、多くの友人が国立台湾大学を始めとする有名大学へ進学しており、今年の「ひまわり学生運動」と称された学生による国会占拠に参加した友人も少なくありませんでした。もし、私が日本へ帰国していなかったら、彼等と行動を共にしていたのかも知れないと思うと、とても他人事とは思えず、Facebookを通じて彼らの安否を気遣いました。

今では、「第二の故郷」である台湾が大好きだと公言できますが、当時小学校4年生だった私には、日本とは比較にならない程厳しい台湾での教育制度そのものが灰色にしか見えず、より豊かな中学校生活を送りたいとの強い念願のもと、日本の私立中学校受験を決意しました。そして、現地校から台北日本人小学校5年に編入するために、2か月半という超短期間で母語を北京語から日本語へ切り換えました。母と二人で小学校1年生から4年生までの教科書を一緒に勉強し、日本人学校編入後は進学塾での猛特訓を受けて受験に臨んだのです。結局第一志望校は不合格だったため、第二志望校に入学しましたが満足できず、中学3年の1学期を終えた段階で区立中学へ転学し、中学受験では不合格だった第一志望校の高校受験のリベンジを図り、漸く念願の充実した楽しい高校生活をスタートさせることができたのです。

そして、大学入学後は、2010年にスタートしたGlobal Citizenship Program (以下GCP)の2期生として睡眠時間を惜しんで、勉学に励みました。GCPは、地球市民の育成を目指した全学部横断型プログラムで、選抜された30名の学生で構成されています。英語や数理能力、課題発見・解決能力等を養成する科目を始め、世界水準の教養を目指す土台作りとして、最初の2年間で集中的にどの分野にも共通する学問の基礎を学びます。そして、3年次には、難易度の高い資格試験を目指して国内で勉学を続ける学生以外は、殆どが交換留学生として、自身の目標達成のために、世界中へ羽ばたいて行きます。勿論留学を決めるのは容易ではないと思いますが、私の大学の場合はそこに至るまでの自然な流れができておりました。GCPでは、1年次修了時に給付型奨学金によるフィリピン研修に参加しました。南北問題をこの眼で確かめる機会となりましたが、カガヤン・デ・オロ市の大学との交流では日本人が失ってしまった美しく力強い瞳や笑顔の輝き、弾けるような生命力が心の奥底に強く焼付



清華大学正門前にて
(2013年2月到着直後)

きました。また、2年次には、経営学部代表メンバー25名の一員としてヨーロッパ研修に参加させて頂き、国連を始めとする6つの国際機関や大学を訪問しました。一流の講師陣による講義を受講した後、「人間主義経営」について英語でプレゼンテーションを行い、高い賛同を得ることができました。

清華大学留学前に、GCP生としての目標であったTOEIC920点を達成することはできませんでしたが、北京語に関しては、大学入学後、独学で小学校4年生のレベルからHSK6級レベルまで引き上げることができ、大学の交換留学試験に臨みました。私の留学の目的は、まず世界最高水準の経営学を学ぶことで、清華大学は中国の大学の経営学部では、最高峰の大学でした。そして、二つ目はHSK6級を取得したといっても北京語で大学レベルの論文を書いた経験もなく、また台湾の繁体字と中国の簡体字との差、発音や表現の違いを学び、北京語力をより強めたいという思いがありました。大学の国際課は、北京語の語学力が一番高い学生を交換留学生として清華大学へ派遣したいとの思いがあったそうですが、それらがマッチングして私の交換留学先が決定したのです。中国語圏への留学試験が英語圏への留学試験より時期が早かったために、先に決まった大学へ派遣が決まったという事情もありましたが、英語圏で経営学がトップの大学と私の大学は交流協定を結んでおりませんでしたので、最高の選択をすることができたと思っております。また、大学の国際課に感謝したいことは、適材適所に交換留学先を決めて下さっただけでなく、私自身は決定してから分かったのですが、JASSOの海外留学のための奨学金（給付型）を受給できるように申込み手続きを進めて下さっていたのです。もし、この奨学金制度を利用することができなかつたら、交換留学生としての一年間はなかったかもしれません。関係者の方々には深くお礼を申し上げます。

清華大学での一年間

清華大学は、北京大学に並ぶ中国トップの総合大学で、特に理工系分野の研究に優れた実績を持ち、卒業生には胡錦濤第6代国家主席や、習近平第7代国家主席が名前を連ねています。キャンパスは広大で、敷地面積は東京ドーム約86個分に匹敵します。そのため、教室間の移動には自転車が欠かせません。この広大なキャンパスには400万冊の蔵書を誇る図書館が7つ、食堂も数多く点在しています。校訓は「自強不息、厚德載物」（自らを向上させることを怠らず、人徳を高く保ち物ことを成し遂げる）であり、美しいキャンパスでは世界中から集まった精鋭の留学生との忘れ得ぬ出逢いが幾つもありました。



清華大学校内朝の通学風景
(自転車ラッシュ)

大学の授業

留学前に、HSK6級を取得しておりましたので、現地での生活や授業のスタートに当たり、コミュニ

ケーションで困ることはありませんでした。私は大学の交換留学生としては4期目でしたが、今回初めて語学留学ではなく学部交換留学生として受け入れて頂き、前期semesterで14単位を取得しました。履修した授業は、留学生向けのスピーキングやリーディング、ライティングの最上級クラス、そして中国概況という地理、歴史、政治、経済等幅広く中国の実情を学べるクラスでした。前期semesterで留学生向けの最上級クラスの授業を受講しておくことが、後期semesterで中国人学生と共に授業を受講する際の自信へと繋がると思ったからです。また、私は経済管理学院ではなく、中国語文学系という学部への交換留学生でしたが、8単位分は他学部の授業が履修可能という制度があったため、この制度を利用して興味のあるマーケティングの授業等も積極的に自由聴講させて頂きました。この時、修士や博士課程の優秀な先輩方が、最年少の私を温かく迎えて輪の中に入れて下さったことは忘れがたい楽しい思い出です。このようにスタートの時点から交換留学生としての時間を一瞬たりとも無駄しないという強い思いが、充実した留学生生活を編み出して行く術であったと今になって懐かしく思い出します。

そして、迎えた後期semester。私は経営学部の授業以外に、清華大学国際問題研究所副所長劉江永教授の日中関係に関する授業や、プレゼンテーションの授業も含め13単位を取得しました。中国人と華僑の大学院生で構成された高度なレベルの授業では、新商品開発のためのプロジェクトをチームで行いました。その際、文系と理系の思考方法の差異や、国籍による意見の食違い等、様々な困難に直面しました。私は唯一の学部生でしたが、自己主張が強い中国人学生の意見から各々の優れた点をピックアップし共創した結果、10チーム中1位の評価を得ました。そして、これらの経験を通し知的レベルが高い相手であっても対等に接し、考え方の違うメンバーの意見を融合させてより良い方向に向け、結果が出せるという自信を得ました。

北京と上海でのインターンシップ

まず、6月に北京の中国著作権保護センターでインターンシップをさせて頂きました。中国において国レベルの著作権の認証を行うことができる唯一のセンターにおいて、違法動画の取り締まり及び著作権保護に関する業務に携わらせて頂いたことは、良い経験となりました。そして、8月は1か月間、上海秀仕観光会務有限公司という森ビル80%出資の観光施設（上海環球金融中心展望台）の経営管理会社において、企画、ショップ運営、営業、財務、総務に関する業務に携わらせて頂きました。全ての部署での業務に携わらせて頂くことにより、企業の仕組みや各部署の果たす役割を学ぶことができ、将来自分が企業でどのような業務に携わりたいかを熟考するチャンスを得ることができました。私が一番感動したのは、企画部門のコンペで10社の企画案のパワーポイントを拝見させて頂けたことです。今までマーケティングの授業で、ケーススタディーを学ぶ経験しかありませんでしたので、実際に企業のプランディングに触れられたことは、本当に大きな糧となりました。また、8月20日に自分が運

営に携わっていた日本アニメの3D展示会開催が浦東テレビ局で放映されました。そこで、丁度運営に携わっていた関係で、一來場者として私自身のコメントが放映されたことも、楽しい思い出となりました。尚、その展示会が中国著作権保護センターの協力の下で無事開催できたということの後で伺い、改めて6月にインターンシップをさせて頂いたセンターの使命を感じることもできました。

世界遺産巡り

限られた休暇を利用してユネスコ世界遺産巡りをしましたが、四川省への旅行を予定していた時に思わぬハプニングが起きました。チケット予約の前日、四川省で大震災が発生したのです。旅先を急遽変更することになりました。友人7名の国籍は、オーストラリア、タイ、韓国、ドイツ、アメリカ、ウクライナでした。各人が限られた旅費と日程の中で、旅行で果たしたいと思っていた夢があり、私は彼等の要望を聴きながら、中国国内の世界遺産をリストアップし、それぞれの魅力を語りました。そして、全員の意見を取り入れて、対立することなく敦煌、蘭州、寧夏回族自治区等の旅行を企画したのです。チケットやホテルの予約からチャーターするタクシー30台余りとの値引き交渉まで、全て一人で引き受けました。その結果、予定していた世界遺産全てを無事に見学し、全員に満足して頂くことが出来ました。



内モンゴル（モンゴル族民族衣装）

合計15か所の世界遺産を訪ねましたが、一番感動したのは、九寨溝の美しい湖と内モンゴルの広大な草原、そしてプラネタリウムより星の数が多いと感じた満天の星空でした。

帰国後

PM2.5の影響や食生活の変化、学業に対するプレッシャー等が重なり、ストレス性やウイルス性胃腸炎、虫垂炎に罹り入院もしましたが、帰国後は次のステップへ向けて即行動を開始しました。まず、本年3月に参加した「2014年度国際開発ユースフォーラム」では多国籍5名のチームで優勝することができ、その後中国語検定準一級も取得しました。



国際開発ユースフォーラム授賞式

就活に際して思うこと

私の将来の夢は、世界を舞台に活躍できる大手企業に入り、そこで社会貢献できる人材になることです。そして、チャンスがあれば、MBAを取得したいと考えております。

さて、就活に関してですが、清華大学では、大手商社やメーカーから語学留学のために派遣されて来ている社員の方と知り合う機会が多く、様々なお話を伺えたことは大きな収穫となりました。また、北京や上海では大手人材会社主催の日系・外資系企業の合同説明会や選考もあり、私もそれを利用してSPI総合検査を受験した後、面接まで進める予定だったのですが、各業界に対する知識不足や自分自身が本当にその企業の提案する職種とマッチングしているのかという大きな不安感から辞退してしまいました。この外、日本人学生のための企業見学会を開催して下さった大手メーカーもありましたが、実際に働き始めた時の様子が想像できず、結局先へは進めませんでした。大学入学後、就活のための適性検査を受けてはいましたが、現実を目の前に突き付けられた時、それは殆ど役には立たなかったのです。もし、この時親身になって相談に乗って下さる大学のキャリアセンターか日本人学生向けの就活塾があり、改めて業界分析や自己分析ができていたならば、就活の成果が得られたかもしれません。しかし、私の留学中の最大の目標は勉学であり、実際に授業の予習や復習、膨大な数のレポートやプレゼンテーションを全て熟し、好成績を残すために必死でしたので、何のサポートもなく人生を賭けるに値する企業を見付ける就活を続けるのは困難であったと、今でも思います。尚、帰国後、清華大学で履修した科目は大学側の配慮で全て単位交換できましたので、4年での卒業が不可能だった訳ではありません。ただ、ゼミの担当教授にご相談した結果、ゼミ履修の関係と共に就活にはやはり十分な時間と対策が必要であることが分かり、5年での卒業を選択しました。4年での卒業にこだわるなら、2年次に留学するという選択肢もありますが、その場合日本の大学での経営学の勉学が中途半端なまま出発してしまうことになるので、一長一短と言えるでしょう。「就活に有利だから留学に行く」という学生もいるかと思いますが、それだけの動機では帰国後の就活で上手く行かなかった時の打撃は大きいと思います。実際、留学を経験したからと言って希望している業界に必ずしも行ける訳ではありませんし、先輩方の事例を見ても全員が希望している大手企業への就職を勝ち取れている訳ではありません。

次に、留学前、留学中、留学後で、志望する進路にどのような変化があったかについてお話したいと思います。留学前、私はグローバルに活躍できる日系大手メーカーか商社への就職を希望していました。しかし、留学中に商社マンから伺ったお話は私が想像していたものとは違っていたこと、また外資系の消費財メーカーが世界中に展開している現実を目の当たりにし、外資系企業に魅力を感じるようになりました。そして帰国後、外資系の消費財メーカーでのインターンシップをするため、数社にエントリーしましたが、非常に狭き門であることを実感する結果となりました。また、外資系に応募し続けている内に外資系には日系企業とは性質を異にする厳しさがあることも情報として入って来

るようになり、グローバル展開に注力している企業であれば、日系・外資系問わずインターンシップを試みようと決め、数十社にエントリーしました。その結果、今までに大手メーカーや通信サービス、コンサル等計7社でインターンシップをさせて頂き、自分にマッチングしている企業風土とは、どのようなものなのか少しずつ判断できるようになって来たことを感じています。もし私が留学中に就職活動をしていたら、きっとこのように様々な企業風土を知ることなく、漠然とした不安を抱えたまま限られた選択肢の中で進路を決めていたでしょう。2016年度卒業生から就活の時期が大幅に変更となりますが、これから始まる秋季・冬季インターンシップに挑戦し続けながら、最終的には自分自身の能力を最大限に発揮し、社会貢献できる就職を勝ち取りたいと念願しております。そのために必要なことは、企業から必要とされる人材に自分を磨き上げることであり、専攻分野を深めながら、まずはTOEIC920点以上を取得し、生涯の目標であるトリリンガルに近付けるよう努力し続けたいと思います。

そして、「真の国際人とは地球の裏側で苦しんでいる人に同苦できる人である」という大学の創立者の言葉を忘れずに、清華大学で培った世界トップレベルの優秀な人脈を活かして、国際貢献していきたいと決意しております。



内モンゴル植林ボランティア

ポーランドに暮らしてみると

—ある日本人学生の視点から—

How Do I Live in Poland?:

From a Japanese Student's Point of View

東京外国語大学大学院博士後期課程 貞包 和寛

SADAKANE Kazuhiro

(Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies)

キーワード：ポーランド、外国政府等奨学金留学生、海外留学

目指すはカトヴィツェ、学生寮

思えば遠くに来たものだ。成田から飛ぶこと凡そ10時間、ヘルシンキで乗り換えてまた1時間、降り立ったのはポーランド共和国の首都ワルシャワ、フレデリック・ショパン空港である。ショパンはおそらく飛行機に乗ったことは無いはずだが、この際どうでもよろしい。ワルシャワ中央駅からさらに電車で揺られること5時間、列車はポーランド南部シロンスク県の県庁所在地、カトヴィツェに停車する。そこから市営バスのターミナルに入り、12番線に乗って20分、私の目的地であるシロンスク大学学生寮はそこにあった。ザドレ公園に連なる広大な敷地、鬱蒼と茂る木々の中に立つのは4棟の建物である。学生寮1号館、2号館、3号館、そして7号館。4から6はどこに行ったのか分からない。寮の守衛にその件を尋ねると、「番号ふり間違えたんだよ」と一言。そんな馬鹿な話があるものか。こうして私の留学生活がはじまった。

私が現在住んでいるのは1号館、通称「ムカデ」寮である。5階建て、南北に長く伸びるその建物は、黒ずんだ外壁も相まって、確かに足のないムカデに見えなくもない。



写真1：シロンスク大学学生寮1号館（筆者撮影）

寮に住む学生たちは自嘲気味に自らを「森の住人」と呼ぶ。無論、ジブリ映画のような夢とロマンに溢れた森ではない。カトヴィツェの街外れ、最寄りのスーパーまで徒歩20分。夜中になれば野生のイノシシが人の捨てたゴミを漁り回っている森である。自嘲したくもなろう。そして今宵もウオッカのボトルが次から次に空いていくのである。

留学生になるまで

拙稿の読者の中には、これから短期、長期を問わず留学を考えておられる方も少なくないだろう。以下、そのような方々に多少なりとも益することを望みつつ、私の留学までの経緯を説明したい。

私は現在、東京外国語大学大学院博士後期課程に在籍し、ポーランド政府奨学金¹留学生（以下、「本奨学金」と略す）の制度を利用してこの国に滞在している。類似のプログラムは他国も実施しているようで、その一部は日本学生支援機構のウェブサイトで一覧できる²。以下は私の経験に即し、ポーランド政府の実施する奨学生募集を例に説明するが、必要書類や応募資格は国ごとに異なっていることがある。その点、予めご留意頂きたい。

本奨学金の日本における窓口は、東京のポーランド共和国大使館が務めている。応募書類は、欧文（英語もしくはポーランド語）と和文の二揃いを用意し、欧文のものはポーランド大使館へ、和文のものは和文書類提出先の日本学生支援機構に郵送する。

奨学金申し込みに際して様々な書類が必要となることは言うまでもないが、中でも推薦状は応募者にとって一つの関門となり得る。本奨学金の場合、推薦状は2枚求められる。かつ、推薦状の原本が日本語である場合、ポーランド語か英語に翻訳したものを大使館に提出しなくてはならない。逆に、原本が英語やポーランド語である場合、日本語に翻訳したものを日本学生支援機構に提出する必要がある。例えば、日本語の推薦状を指導教官などから得られたとしても、それをさらに翻訳するという手続きが必要となる。他の書類（履歴書、研究計画など）に関しては応募者本人の翻訳が許可されているが、推薦状に限っては第三者による翻訳が絶対である。私の場合、この点が非常に恵まれていた。

東京外国語大学ポーランド語専攻時代に師事した先生方や学友の助力を得て、推薦状に関しては円滑に事を運ぶことが出来たからである。もしこのような繋がりを持たない場合は、予め信頼できる翻訳会社を決めておくことを強くお勧めする。

推薦状の次に重要な書類は、研究計画である。後に詳述するが、面接においては提出した研究計画を基に質疑応答が行われる。よって、しっかりとした計画を書くことが自然と面接の対策ともなる。枚数等の分量は特に指定はないが、そう長いものである必要はない。私の場合は A4 で 2 枚ほどだったと記憶している。

書類提出を終えた後はいよいよ面接である。大使館や日本学生支援機構から別途連絡が無い限り、予め指定された日時に大使館へ向かうこととなる。提出した研究計画などを面接の一週間ほど前から入念に読み返し、自分がなぜ留学に行きたいか、ポーランドでどのような研究をしたいかを再整理する。さらに面接の前日、当時東京都府中市に住んでいた私は、東京五社のひとつである大國魂神社に赴き、学業成就のお守りを購入した。つまり、やるべきことは普通の試験や面接前と変わらないのである。未来の応募者もまた、それまで自分が積み上げてきたものを信じ、平常心で望めば、何も案ずることは無いと確信している。

面接は日本語で行われる。試験官は 2 名、大使館職員（ポーランド人）と、日本の文部科学省の担当者である。私の場合は、修士課程まで専らポーランドに関係する研究をしてきたこともあっただろうが、志望動機に関してはそれほど深く質問されることはなかった。無論、これまでポーランドに関わったことの無い方が本奨学金に応募されるのであれば、なぜ本奨学金を志望したかについて深く尋ねられる可能性はあるだろう。しかしこれに関しても、やりたいことを明確にし、意欲をもって伝えれば問題は無いものとする。と言うのも、それまでポーランドとは殆ど無縁の生活をしてきた後に本奨学金に採用された方もおられるからである。

以下は私の個人的な話になる。採用後に問題が起こった。シロンスク大学からの受入通知が届かないのである。大使館担当者から採用のメールを頂いたのは 7 月の終わり、そのうち大学から郵便かメールが送られてくるのだらうと私はのんびり構えていた。しかしひと月過ぎてもナシのつづて、大使館の担当者も「大学にお問い合わせ下さい」と繰り返すばかり。8 月も終わりが見え始めてくると、流石に焦りだした。出発予定は 10 月 1 日、しかし受入通知が届かない今の状況では、留学ビザも申請できないではないか。ついに堪りかねて、以前にポーランド語夏期講習でお世話になったシロンスク大学の教授に泣きついた。すると 3 日後、学長補佐のサインが入った受入通知がメール添付で届き、すぐ後に原本が郵送されてきたのである。これには開いた口がしばし塞がらない思いであった。つまり、待ち続けた 1 か月は全くの無為だったという訳だ。料亭なら女将が土下座するくらいの話である。

この 1 件から我々は何を学ぶべきか。それは、個人的な繋がりを積極的に持ち、かつ極力それを活かすべきである、ということだ。こと留学に関して言えば、受け入れ先の誰かに知己を得ていれば、

私の場合そうであったように、何かと便宜を図ってもらえる。無論、初めから好意に甘えるような心持ちは頂けないが、いざという時に頼れる人と連絡を持っておくことの重要性は変わらない。これから留学を考えておられる方も、奨学金なりプログラムなりに応募する前に、自分が指導を仰ぎたい人物にメールや手紙で予め意思表示をしておく事を勧めたい。その際に、自分の研究計画などを提示することが出来ればなお良いだろう。場合によっては、その先生に推薦状執筆を願い出ることもできる。

まとめると、以下のようなになる。

- (1) 自身の研究計画等を準備し、常に見せられる状態にしておく。
- (2) 留学を希望する大学や研究機関の関係者とコンタクトを取れるよう模索する。
- (3) 必要書類の中でも、推薦状は取り分け早めの準備が肝要である。
- (4) 採用が決まっても安心しない。

住めば都

冒頭の記述から、現在の私の居住地に最果ての地のごとき印象を受けられた方も少なくはないだろう。ここで正直に告白するが、些か大袈裟に書いている点はある。病氣自慢、怪我自慢ではないけれども、我が身の不幸を実際より大きく託ちたくなるのは人の業というものである。どうかご容赦頂きたい。確かに少々便の悪い部分はあるものの、概ね私は現在の生活が気に入っている。そのような訳で、以下は私の現状について、大学以外のことも含めて簡単に記していこうと思う。

現在私は、学会やセミナーなどに参加する際、シロンスク大学博士課程という肩書を用いている。実際は政府給費留学生としての滞在なので、正規の大学院生と言うより「客分」の扱いになるのだが、日本で修士論文を書き終えていたので、博士課程在籍者（ポーランド語で doktorant）を名乗っても問題無いとのことであった。大学の授業に関して言えば、大学事務局からカリキュラムなどの細かい指示はされていない。基本的には、履修したい授業の担当講師に個人的に連絡を取って参加させてもらうという形である。博士論文を書こうという者は自分で考えて動きなさいということなのであろうが、カリキュラムに縛られず研究に専念できるのは非常に有り難い。ご縁の有る先生方とは、論文やプレゼンテーションを作成する際に、ポーランド語の添削を含め意見を交換している。必要な時だけお知恵を拝借しているようで冥利が悪いのだが、全ては学問のためである。

留学当初は、ポーランドに居住するウクライナ系の少数民族「レムコ人」の言語に興味があった。現に、私の修士論文のテーマはそのレムコ人の話す「レムコ語」をテーマとしたものであった。しかし留学生活が3カ月、半年と過ぎていく内に、次第にポーランドのマイノリティ言語や、それらを扱う言語政策一般に興味に移り始めた。この心境の変化の理由は自分でもよく分からないが、カトヴィツェという街に滞在して、シロンスク地方の方言に触れたことが大きいのではないかと思われる。

シロンスク地方は、あるいはシュレージェンやシレジアという呼称のほうが我が国で馴染み深いか

も知れないが、その特異な歴史と共に、独特の方言でもって知られる地域である。この地方の言葉はシロンスク方言と呼ばれ、ポーランドの言語学界では伝統的に「ポーランド語方言のひとつ」と見なされてきた。しかしながら 2011 年の調査で、自らの民族籍（アイデンティティ）として「ポーランド」ではなく「シロンスク」を選択した者の数がおおよそ 362,000 人に上ることが判明した。ポーランドの総人口が約 38,000,000 人であることを考慮すると、これは決して小さい数とは言えない。無論、現代は地域や国境を超えて多くの人々が往来する時代であるから、「シロンスク人」とは如何に定義されるかという問題も出てくる。しかし、この地方の住人の一部に、自らの話し言葉を「シロンスク語」と認めることを要求する人々が少なからずいることは事実である。他のポーランド語方言地域では、言葉に関するこのような議論は殆ど見られないので、この問題はシロンスク地域の一つの特徴と言っても良い。実際に街を歩くと、標準ポーランド語とは語彙や発音の点でやや異なる言葉が用いられているのが耳に入ってきて興味深い。そのような訳でこの頃は、ポーランドに限らず EU やアメリカのものも含め、言語政策全般に関する資料を集め、その中で特にポーランド的と呼べる特徴は何かということを考えている。

次に、研究以外の生活について書いてみたい。長期滞在して最も良かったと思えることの一つに、在り来りではあるが、現地の年中行事や人の機微に触れられるということがある。短期の旅行や滞在だけでは、その辺りの呼吸を深く知ることがなかなか難しいものだ。また、学友のご家族の中には、折にふれて私を自宅へ招待して下さる方があり、全く感謝の念に堪えない。拙稿では、4 月の復活祭に私が訪れたジヴィエツという町の思い出を、写真と共に振り返ってみたい。

ジヴィエツはポーランド南部、スロヴァキアとの国境約 20 km の場所にある。行政区分としてはカトヴィツェと同じくシロンスク県に属するが、文化的区分としては寧ろ、クラクフを中心とする「小ポーランド」と呼ばれる地域に属す。下の写真は町の中心部、市場の光景である。



写真 2：ジヴィエツの広場の様子（日本語版ウィキペディアより）

三国分割によるオーストリア支配下の 1856 年、ハプスブルク家のアルブレヒト大公によってこの町にビール醸造所が建設された。そこで生産されたビールは今日、ポーランド全国に流通している。ジヴィエツ醸造所を中心とする五つのビール工場は「ジヴィエツグループ」を形成し、ポーランドにお

けるビールシェアの35%を占める。恐らく、ポーランド人でジヴィエツという町を知らないものはいないだろう。なぜならそのビールの名は、町名を取ってそのものずばり「ジヴィエツ」と言うからである。このビールのロゴマークは民俗衣装を着て踊る男女の姿をあしらったもので、非常に美しい。残念ながら拙稿では個別商品に関わる画像は添付できないが、興味を持たれた方は「ジヴィエツ ビール」と検索して頂きたい。カタカナで検索すれば日本語のブログ記事等が見つかるはずだ。

さて、私にはかの地を出身とする神学部の友人がいる。その友人が今年の復活祭（イースター）の休暇に実家に誘ってくれたのが、この町を訪れた初めであった。友人宅はジヴィエツ駅から車で20分ほど、町の郊外にある。ご家族は両親、友人、姉が一人に弟が二人。これだけでもかなりの人数だが、さらに里子としてご両親が育てている子供が7人。これに2匹の猫と3頭の犬が加わった大所帯である。さらに、日本の盆正月でもそうであるように、休暇中は親戚や知合いが家を頻りに訪ねてくるものだから、家の中は人の声が常に絶えることがない。ともかく賑やかな滞在であった。



写真3：復活祭の食卓（筆者友人より提供）

写真は復活祭に際して饗された晚餐である。周知の通り、復活祭とは十字架に架けられたイエスの復活を祝うキリスト教の習慣であり、国や地域によって細部は異なるものの、卵が「復活」のモチーフとされている。日本においても装飾品としてのイースター・エッグはよく知られており、最近では蠟で絵付けしたウクライナのイースター・エッグ「ピーサンキ」が人気を博していると聞いている。ポーランドにおいても卵に絵付けする習慣があり、食卓では多彩な卵料理を家族で囲む。写真3でも、卵を使った料理を三つ見つけることができる。

まとめ

私はいま、好きなことを好きなようにさせてもらっている。人生80年という時代になってきているが、このような時を過ごせる期間というのは貴重なものであろう。人によっては健康上、経済上、あ

るいは他の要因から、そのような時間を殆ど持てないということもあり得るからである。その点に考えを及ぼす時、自分の現状はひとえに周囲の理解と助力に恵まれた故の結果であることを痛感する。無論、外国ぐらしは何かと勝手が違い、随意に任せぬこともある。しかしそれらを差し引いても、非常に贅沢な、将来において実りある豊かな時間であることに変わりはないのである。拙稿を読んでもらえる皆さんの留学もまたそうなって欲しいと願いつつ、筆を擱くこととしたい。

¹ (編集部より注) 外国政府奨学金の募集や必要書類は年によって変更があるため、応募を検討している方は必ずその年の最新の募集要項を確認することが必要です。

² 詳しくは日本学生支援機構「外国政府等奨学金留学生」のページ (http://www.jasso.go.jp/study_a/scholarships_foreign.html) を参照していただきたい。

次号予告

ウェブマガジン『留学交流』 11月号

特集「海外の大学との交流」

協定校との交流・留学プログラム／非漢字圏からの留学生との交流



ウェブマガジン『留学交流』 10月号

Vol. 43

平成26年10月10日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

(編集部) 留学情報課

東京都江東区青海 2-2-1 (〒135-8630)

電話 (03)5520-6111

FAX (03)5520-6121

Eメールアドレス ij@jasso.go.jp

編集後記

日本人学生の海外留学減少の一因として、就職活動への影響はこれまでも度々指摘されています。

本号では、留学経験を世代を超えてつなぐプラットフォーム形成への新たな取り組み、日本人学生が安心して留学できるような大学のキャリアサポートプログラムの事例や、ワーキングホリデー等海外体験プログラムから帰国後の青少年のキャリア形成支援整備の事例をご紹介します。

また、留学を終えて現在就活中の日本人学生の体験談では、留学経験者が就活を迎える心境や大学に求められる支援への示唆が得られるのではないのでしょうか。(編集部)

Web Magazine “Ryugakukoryu”(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.
(Issue date: 10th of each month)